

優秀賞

考えることを止めない

桶川中学校三年 二瓶 優月

男の人が日傘を差すことは、少し前までは見かけない光景でした。昔の日傘は、白くてレースのようなデザインがほとんどで、とても男の人が持つようなものではなかったからです。きっと白いレースの日傘をサラリーマンが差していたら変わった人と見られたと思います。でも男の人が直射日光に当たって良い訳ではないし、熱中症にならない訳でもありません。だけど白いレースの日傘をサラリーマンは差しません。なぜなら『無し』だからです。

私達は知らず知らずのうちに『有り』か『無し』か、いわゆる普通か普通じゃないかを頭の中で分けて、自分もその結論のもと、『有り』の方でいなければならぬと思っ

のだと思います。『有り』か『無し』かを決めることは毎日繰り返されます。朝起きて家族との挨拶の態度も、鏡の前でセットする髪型も、学校で休み時間に友達と喋る話の話題も、『有り』を選び続けければ時間はスムーズに流れて、なんて楽しい日だったのだろうと眠りにつきます。逆にどこかで『無し』を選んでしまおうと、そこから立ち直れない程のダメージを受けることもあります。

私達は『無し』を選ぶことに、とても恐怖を感じます。だから『無し』の人の行動や見た目、様子などを見かけると、笑ったり、見えて見ぬふりをしたりします。自分が『有り』にいることで気持ちが大きくなるのです。

「みんなが思う方はどっちだ？」

「正解はどっちだ？」

と毎日繰り返し、時には自分の意見を押し殺して『有り』な自分を演じていることもあり、ます。もし自分が思っていることしか言えなくなったら世界はどう変わるのだろうか。時々本当の自分の気持ちや意見を言えなかったとき、そんなことを考えます。

家族で買い物に出かけたとき、中学生くらいの男の子がお店の前で寝転んで大泣きしていました。私は、

「寝転がるほど泣かなくてもいいのね。」

と笑いながら母に言いました。少し経つと今度は立ち上がって物凄い速さでお店の中をグルグル走り出しました。私は頭の中で『無し』
と思い、

「なんか凄いな。」

と言いました。母は、

「自閉症かな：お母さん大変だろうな。」

と言いました。時々変わった行動や独り言を言う人を見かけます。

「そういう人も自閉症なの？」

私は、母に聞いてみました。

「中には自閉症の人もいるよ。自分ではどうしようもないの。生まれ持った特性だから。」
と言いました。寝転んで泣いていた子は自閉症という特性を持つ子でした。一瞬でも『無し』だと思った自分が恥ずかしいと思いませんでした。

自閉症はどんな特性なのか、私はとても気

になりました。本屋さんで『自閉症の僕が飛び跳ねる理由』という小説を見つけました。私はその小説を読み、自閉症がどんな特性を持つのかを知り、胸が詰まり何とも言えない気持ちになりました。自閉症の人は、相手の目を見て話をしたり、自分が思ったことを言葉にしたり、相手が何を思っているのか考えたりすることが、難しかったり、苦手に感じたりするそうです。

それはまるで、純粋に思った気持ちを伝える小さな子供のようだと、私は思いました。寝転んで泣く程の悲しい思いや、嬉し過ぎて飛び跳ねてしまう思いは、誰もが年少期には当たり前でしたが、いつしか自分の気持ちも押し殺し、自分は色々考えているようで、実は何も考えなくなってしまうのではないかと、私はハツとしました。

寝転んで泣く姿を見て、私は笑っただけで、何故そんなに悲しいのか、お母さんはどんな気持ちなのかなど、何も考えていませんでした。小さい頃、私が泣いた時は、必ず寄り添ってくれる大人がいました。自閉症の人のそ

ばにも笑う人ではなく、寄り添って理解してくれる人が必要だと、小説を読んで気付きました。

自閉症に限らず、世の中の色々な人や物事に対して、もつと真剣に向かい合う必要があると思います。男の人用の日傘を考えた人は、どうしたら熱中症が防げるか、日傘の本当の意味を考えた、強い心と優しい心を持っている人だと、私は思います。

自分が持っている知識や常識だけで、『有り』か『無し』かを決めるのではなく、色々な人の意見を聞き、自分で考えて、本当の答えを見つけてることが出来る、強い心と優しい心を持つ大人に、私はなりたいと思いました。